村上忠順翁顕彰会報

養老の滝　（撮影:酒井）

村上忠順翁顕彰会報　第２５号

編集　　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　　平成２６年３月３０日

★ 目 次 ★

・心の豊かさを求めて　2
・村上忠順翁顕彰会の歴史探訪に参加して　3
・女性部研修会に参加して　3
・村上忠順翁の蔵幅　『蔵幅一覧』から　4
・平成２５年度活動報告　6
・忠順大賞入賞作品　7

心の豊かさを求めて

村上忠順翁彰会　会長　近藤　光良

最近はスマートフォンを持っていないと引け目を感じる時代となりました。残念ながら私もガラ携と言われる古いタイプの携帯電話を使用しています。電車に乗っても、人が集まっている場所でも若い人たちを中心に半分以上の人たちが話もせずにスマートフォンに向かっています。何か異様な雰囲気を感じます。確かにスマートフォンは便利だと感じます。瞬時にして、欲しい情報、映像、音楽やゲームが入手できる等々です。彼らにとって、まわりの景色がきれいか、空がきれいだ、季節の移り変わりが感じられる、といった微妙な変化は関係ないようにも感じます。それだけでなく、すぐそばにいる自分の家族や仲間の行動がどうであるかさえ興味がないようにも思えます。

携帯電話をはじめとした情報文明はどんどん発展していきますし、それを応用した産業社会も、与える影響を無視し、消費者に関心の高い道具や情報を次から次へと提供します。残念ながら、私たちにとってはそれらをじっくりと検討している時間がないほどです。例えは適切ではありませんが、まだその力を使いこなせないでいる原子力と似ているようにも思えます。携帯電話も一つ間違えるととんでもない災難に巻き込まれたり、巻き込んだりしてしまいます。携帯だけではありません。車をはじめとするいろんな道具もそうです。利用する主体である私たちがしっかりすることが必要となります。

最近の話題の一つに、リニア新幹線が引き合いに出されます。明治以前は江戸―名古屋間の交通手段は徒歩か馬でした。村上忠順もこの間を約十日間で旅をしました。途中宿に泊まり、いろんな風景を楽しみながら旅を楽しんだことでしょう。やがて明治時代になり、鉄道が開通し、半日程度で着くようになりました。さらに戦後、高速道路が完成し、約五時間に短縮、さらに新幹線開通により、「のぞみ」で一時間四十分程になりました。これでも人間の欲望は飽き足らず、二〇二七年のリニア新幹線開通を目指し、工事が着工されます。リニア新幹線が完成すると、時速５００キロメートル近いスピードで東京―名古屋間は約四十分になります。途中はほとんどトンネルであり、外の景色が見えても飛ぶように過ぎ去り、景色を楽しむ余裕はなさそうです。まさにビジネスのための交通手段と言えそうです。

人は効率化を求める一方で、東京の下町の古い民家住まいを楽しみ、田舎の空き家を改造し、ゆっくりした時間を楽しみ、自作の野菜での食生活と自分を取り戻す生活を楽しむ、時間をかけても手作りの文化を楽しむ人たちが増えつつあるように感じます。機械文明の便利さ、豊かさの恩恵を受けつつ、どっぷり浸かってしまうのでなく、自分としての生き方を見つけ、心の豊かさを感じながら生活することが見直されてきたのではないかと思います。それを考えさせてくれるのが文化ではないか、忠順が和歌を好んだ理由も、あわただしく変化する幕末時代において、豊かな心を保つための大切な時間が必要であったと感じます。

最後に、これまで長年にわたり顕彰会の活動にお忙しい時間を割いていただいた新行先生に感謝を申し上げたいと思います。残念ながら先生は病気治療のため、故郷の北海道に帰られることになりました。

九年間にわたり、ご多忙にもかかわらず四方樹大学において、忠順著『座右記』を解説し、忠順の日常生活や江戸末期の人々の生活を浮き彫りにしていただき、毎回面白く拝聴いたしました。あと少しで完訳であったのに残念ですが、これはまたの機会にしたいと思います。先生にはこれまでご指導いただいたことに対し深く感謝申し上げるとともに、一日も早く完治されますことをご祈念申し上げます。

四方樹大学で
講義する新行先生

会員の皆様におかれましても、健康で、心豊かな生活を過ごしていただき、今後も村上忠順翁顕彰会を盛り上げていただくことをご期待申し上げます。

村上忠順翁顕彰会の歴史探訪に参加して

長谷川　学

平成二十五年十月の今にも雨が降りそうな曇り空の中、高岡農村環境改善センターを集合場所として四十名余の参加者と共に車中の人となりました。

車内では、『養老日記』による養老への旅の説明や、天誅組と村上家との関連の話があり興味深かったです。

最初に訪れたのは赤レンガの産業技術記念館です。繊維機械館では近代化産業遺産でもあり織機など実演もある歴史的に興味ある展示機器及び自動化された近代的な機械が並び面白かったです。自動車館では、国産最初の乗用車やトラックから最新のハイブリッド車まで展示と説明があり、これは大変私には難しい展示品でした。

次に向かったのは、桑名の人で、山林で財を成した実業家諸戸清六の建物を市に寄贈した『六華苑』。和館と洋館がありますが、洋館は、円形の四階建塔と曲面で当時珍しいとガイドボランティアの方の説明に納得すると共に、庭園が大切に管理されている様子を見ることが出来とても感心しました。

昼食には、桑名でハマグリを美味しく賞味しました。

午後からは、木曽三川の堤防を走り、薩摩藩が苦労して治水工事をしたという治水神社を車中で眺め、孝行息子の伝説がある『養老の滝』と多くの文人が宿泊したという『千歳楼』の二班に分かれて見学することになり、私は宿名の墨蹟のある千歳楼に曲がりくねった急な坂道を登って行き、お茶をいただきました。

最後に駐車場隣にある養老寺の歴史といわれ多くある千手観音像を拝観させていただき良かったです。

このように、歴史の一端を、垣間見ることが出来、とても有意義な一日でした。

企画された役員の方々に感謝するとともにありがとうございました。

養老寺にて

女性部研修会に参加して

高部博子

去る七月七日（日）梅雨明けぬのに日傘を片手に、午前九時高岡農村環境改善センターに集合した四十余名を乗せたトヨタ自動車のバスは、「トヨタ鞍ヶ池記念館」、「美濃市卯建の上がる町並みと刃物の関市」へと向かいました。

「トヨタ鞍ヶ池記念館」では、名ガイドさんから、自動織機の完成でその技術を世界のレベルに引き上げた豊田佐吉の功績と、その息子豊田喜一郎とその仲間たちが作り上げた今世界に誇るトヨタ自動車の足跡。トヨタ創設時の車、トヨダＡＡ型乗用車にバックミラー、ウインカーがない、必要ではなかった。警笛が道を行きかう牛や馬が驚かないよう聞きなれたお豆腐売りのラッパによく似た音とした。などなど聴き、眼にし、時代の流れを感じるとともに、何かを生み出すことの困難さ、苦労は計り知れないものだと思いました。そして、一番驚いたことは、牛や馬などという動物までにも温かい配慮がなされていたことです。

鞍ヶ池アートサロンでは、「五感を澄まして」をテーマにたくさんの作品が展示してありましたが、じっくり味わう時間がありませんでした。また余裕をもって出かけてみたいと思います。入場料無料は魅力です。

美濃市の国選定重要伝統的建造物群保存地区卯建の町並み散策では、観光ボランティアさんを先頭に、強い日差しの照りつける中散策を開始しました。

江戸時代金森長近公は、長良川畔に川湊を水運の要衝とし、商人町は水害を避けて丘の上に築いた。そのため水利が乏しかったことから、防火や類焼防止のために「うだつ」が設けられた。その軒飾りが次第に〝富の象徴〟〝努力の報酬〟という意味合いを持つようになり競って凝った装飾となったということです。

凝ったうだつの上がる軒並みに、当時の町の華やかさと商人の生き様が目に見えるようでした。また、うだつを造った職人技に敬服しました。そして、一般庶民はどんな暮らしをしていたのだろうかと思いを馳せました。

噴き出す汗を拭いながら散策を終え、高岡町にも村上忠順翁にまつ

わる散策コースを作ってボランティアガイドを育成したら・・・。

辰巳屋で昼食をとり、フェザーミュージアム・刃物会館を見学し、一路帰途に、農村改善センターへ五時に到着しました。

とても暑い一日でしたが、お世話係の皆さんの気遣いのもと、熱中症にかかることもなく楽しい時を過ごすことができました。

我が自治区が誇る村上忠順翁顕彰会女性部が増々活発に我々を引き上げてくださることを願ってやみません。

最後に、トヨタ自動車のバスの提供にも感謝します。

フェザーミュージアムにて

村上忠順翁の蔵幅『蔵幅一覧』から

東京都立小岩高等学校教諭
学術博士　中澤伸弘

徳川時代の知識人の「知」を考へる時に参考になるものは蔵書である。どのやうな書物を集め、それを読んだのかは、その人物の研究に大いに参考となる。忠順翁の場合はその蔵書の大方が刈谷の村上文庫に所蔵されてゐることを幸ひとする。また村上家には嘉永二年の序文がある翁の『蔵書目録』があつて、翁の三十八歳当時の蔵書の様子が知られるものとなつてゐる。

一方、文人であり歌人であつた翁が、その文雅の表れとしてどのやうな幅物を所持してゐたのかは興味のあるものである。歌の短冊や懐紙、また絵画などを表装し軸ものに仕立てたものを幅物と言ふが、幸ひに村上家に翁の手になる幅物の目録である『蔵幅一覧』と言ふ書物が残されてゐる。これは明治十四年に翁が纏めた目録であり、その点では亡くなる三年前、晩年の翁の蔵幅が知られる貴重なものである。文雅の人物の蔵書の目録はあるものの、蔵幅の目録などはあまりないのではなからうか。

歌の短冊や懐紙などは徳川時代の早い頃から持て囃され、寄贈や交換、また売買などを通じて、その蒐集は盛んなもので、贋物まで作られたと言ふ。翁も短冊を贈つたり、貰つたりしたやうで、それを幅物にして大切に保管し、時折に床の間に掲げたのであらう。それゆゑに直筆の幅物は所蔵者にとつてはまた貴重なものであつて、何かしらの縁故のあるものと見なしてもよいものと考へられる。

本書の内容は目次によれば次の二十八種である。

歌　仏足石歌　画賛歌　勿来関碑　長歌　一行　詩　画賛詩画　萬葉緯序　紀氏遺蹟碑　賀茂翁碑　熊代翁碑　那須野碑楠公碑　小埜晁恵碑　霊山碑八橋碑　細井平洲碑　菊水碑養老山　遊養老山　養老美泉辯画記　誹諧　敬　五徳説　立言説

このうち仏足石歌や勿来関碑、紀氏遺蹟碑以下菊水碑までの計十二種は、それぞれの場に建立された石碑の拓本を幅物にしたもので（養老山遊養老山　養老美泉辯もさうかもしれない）、また五徳説　立言説は平田篤胤の著作であつて、板木で刷つた一枚物を幅物に仕立てたものと思はれる。よつて直筆ものは、歌　画賛歌　長歌　一行　詩　画賛詩　画萬葉緯序　画記　誹諧の類とならう。（この他、目次にはないが「額」の項目がある。）

忠順翁は序文で、自らの蔵幅について、次のやうに言ふのであつた。（括弧書きは割り注。傍線部は文字が細かいため判読が出来ず、意味の取れない語。）

文政十あまり二年　父君（忠幹禮郎）刈谷（土井侯）につかへ
まつりたまひて　かしこにひき
うつりたまひて　其年の十二月
兄君（真武　文晁）身まかりた
まひければ　忠順尾張の國名古
屋にもの學びし有しを　とみに
引とりて十八歳の冬よりこの堤
の郷の家になむものしける　其
比までは書画あはせて三四十幅
ばかり有き　おのれかかるもの
をことさら□このてとにはあら
ねど　あるはもとめ　あるは表
装しなどしてことし七十歳にな

るまでに百幅にあまれり　いにしへの名だかき人々のは価いみじければ　えものせず　ことにまことといつはり見わくべき眼しなけれど　そはおきてえうるまにまにあがなひおきつるになむさてかうかずかずになれば子うまごはふしも□こると　あなよみ思へばかく一とぢに書きととのへば　末の代永くつたふるになむ　させる名だたる人々のならねば　いたく思ひあなづりて打ち棄がちになせそ　年ごとに夏のほどはかけ干て　しみのすみかとする事なかれ　あなよしなの老のくり言や

明治十四年十一月

武羅閑美多太萬左

これによると文政十二年に父忠幹が刈谷侯に仕へ、その年に兄が亡くなつたのを受けて、名古屋の遊学から急遽堤村へ戻り翁が家を継いだのであるが、そのころに三十、四十幅のものを所持してゐたと言ふ。十八歳当時のことだが、これは村上家にあつたものか、また翁が名古屋で求めたものかはわからない。その後もあるに任せて蒐集をし、表具などしてこの七十歳までの間に百幅を越えたのであつた。有名な人物のものは高価であるし、真贋を見分ける目もないが子孫に残すことを思ひ、一巻にかき集めて整理してみたのである。そして大した書画ではないと投げやりに扱はず、夏には干して虫がつかないやうにせよと命じるのであると言ふ。

このことから翁の幅物の蒐集は約五十年間続けられ、本書には余白が残してあるところから、更なる蒐集の意欲があつたこともわかるのである。歌、詩、絵と様々の分野にわたり、作者、題、歌（詩）などが抜き書きされてゐて、かなりの量があるが、ここでは主に和歌幅について見てみたい。

和歌の巻頭は後光厳院（天皇）の和歌懐紙「いづくともまたれしものをいまはまたなかぬさとなき郭公かな」である。ついで「香川ぬしに小松画かきてまゐらすとて」と題した秦鼎の二首、冷泉為村の「花」、橘守部の「山花隔霞」と続く。以上は懐紙の幅物であつて、以下は短冊の幅物である。掲載順に名をあげると本居大平、植松茂岳、木村千齋、渡邊綱光、小林歌城、橘守部、大田垣蓮月、熊代繁里、三島自寛、本居宣長、石川依平、萩野重道、八田知紀、村上潔夫、中村良臣、倉橋泰顕、倉橋泰聡、白川雅言、保堂、俊実、千種有功、高松公祐、遊翁　秦鼎、橘冬照、鈴木朗、長澤伴雄、香川景嗣、元幹、正輔、岡本保孝、伴蒿蹊、千家尊澄、河本延之、田口敬儀、小川萍流、千家尊孫、荷田信美、渡忠秋、慈延、前波黙軒、小澤廬庵、倭文子、岩上登波子、市岡陸子、美沙子、登勢子、たか子、高畠式部、　桜木、かど子、由美子、祇園白拍子きた子であり、このあとに楠正行の有名な歌「かへらじとかねて思へば～」の歌、賀茂真淵、安規、浅草庵市人、大田南畝、植松有経とあつて、後光厳天皇をいれて六十一人となる。

この並び順は一見乱雑のやうであるが、実は翁と歌の添削などの師承関係にあつた者、または近い存在であつた者であるやうだ。翁が守部の門に入つたことは別稿に論じたことがあつたが、そのことはこの巻頭に守部を据ゑたことからも判る。高松公祐をはじめ、茂岳、千齋、綱光、重道、などは若い頃の歌の師匠である。繁里、依平にも師事して学んでゐるし、歌城については安政の江戸訪問以降の師である。蓮月や式部などは深い関係にあつた。また重複する数として一番多いのは守部の七本、ついで依平の五本、茂岳の四本、朗、歌城、蓮月、繁里、景嗣の各三本、公祐、重道、千齋、綱光、大平、高畠式部の二本であり、あとは各一本である。真淵や宣長があるが他の著名人のものはない。公家のものも極めて少なく、何れも自分と関係の深い人物ばかりである。

この数も翁の師承関係からくるものであらうし、守部に対する傾注が多かつたこともここからも判る。これらのものはもともと表装された幅物として購入したものもあれば、のちに表装したものもあらうが、どのやうな人物のものが翁にとつて表装しなくてはならない存在の人物であつたことかもわからう。中でも木村千齋（不可得）の、次のやうな長い詞書きのある歌を幅物にしてゐるのである。「むらかみぬしはみやびの道に志深くよみ出給へる歌ども数々書きつらねて　そがよしあしを予してよみてよとせちにこふを　おのれもとよりつたなく□□老いにすすみて・・・わけいらむ心の道し直からば人ほどはしのひとりたのむな」と、千齋は弘化三年に忠順が三十五歳の時に逝いたので、この歌はそれ以前のものであり、折節師を思うてはこ

のやうな幅物を掲げてその在りし日の面影を偲んだのであらう。

次に歌で絵入りの画賛になつてゐる幅物を見てみる。

この中で注目されるのは「忠順像」である。翁の肖像画は二種あつてともに復古大和絵派の兒島基隆の手になる。一つの画賛の歌は翁の壮年像で「ますらをのみがくこころのしらたまはいてりとほらむあめつちのむた　ふみにとみきものをしものあまたあればいでやつとめてものまなびせむ」の二首が書かれてゐる。いま一つの画賛は翁の老年のもので「世のうさはきかじもとめでしめやかにひとりふみしる蓬生の廬」とある。また若くして松本奎堂に従つて逝いた忠明の賛があるものが三幅ある。一つは同じく基隆の桜の画に忠明が「昔より見る人毎にをしまれてちるこそ花のいのちなりけれ」と賛をしたものであり、一つは基隆画になる忠明像に自賛した「磯城島のやまと心は天皇につかへまつらふ月日なりけり」であり、また通根画月と富士山に忠明が「秋ながらかげこそこほれふじのねの雲にうつろふよなよなの月」の賛をつけたものである。桜の絵の賛の歌は『六華集』所収の「忠明遺稿」にあるが、他の二首の歌はそこには著録されてはゐない。

他に北島全孝賛（仲祥画亀三水）、八田知紀（自題歌賛）、田中大秀賛（石雲齋画梅月）、中村守臣賛（秦鼎画梅）、賀茂季鷹賛（狩野縫之介画富士山）、小林歌城賛（雪窓画花）、渡邊綱光賛（玉仙画竹、梅）、蓮月画松、自賛などがある。中には荷田春満の幸成あて五月八日消息などが含まれてゐる。この中で数の多い物は熊代繁里の九本、木村千齋の四本、本居内遠の三本などである。いづれも翁の師である。またここでは守部は二本であるが、その子の冬照が三本、冬照の妻登世子が二本となつてゐる。藤波教忠の「詠読標註古事記長歌」は明治十二年の冬とあるが、翁の『標註古事記』を読んでの思ひを述べたものである。

以上が主に歌についてのものである。

巻末に目を引くものは「額」と題する項目で、これは目次にはない項目である。「額」とあるので巻子の形のものではなく、額装されたものである。主な物をいくつか挙げてみる。

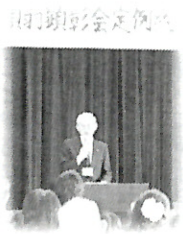
蓬廼廬　有栖川宮熾仁親王
忠順が堤の里なる蓬の廬にて
土井利善
寄花祝　植松茂岳
無題　渡邊綱光
春秋の歌の中に　木村千齋
蓬廬　秦世寿
観猿投　石川依平
蓬園　霞樵
尚古堂　徐荷舟
千巻舎　土井恪

これらはいづれも翁の書斎などに関する額物である。熾仁親王はじめ刈谷藩主など、また師の歌や近い人物のものを額装してゐることがわかる。蓬廼廬、蓬廬、蓬園、千巻舎などは翁のゆかりの号であるが、尚古堂の号があつたことはここから明らかであり、千種有功の歌集『和漢草』の編者である尚古堂が翁であることの傍証となる。

平成二十五年度　活動報告

事務局　酒井順子

○四月二十一日
＊定例総会
参加者　百十八名



総会の様子

＊記念行事
・銭太鼓演技

駒場こども園の園児

＊記念講演
「村上忠順と深見篤慶」
講師　郷土史研究家
久米昭次郎氏

＊「忠順大賞」表彰式

○七月七日
＊女性部研修会
「卯建のまちを巡り和紙を愛で『美濃春秋』を味わい繊細に触れる旅」

参加者四十二名
・トヨタ鞍ヶ池記念館
・卯建の町並
・フェザーミュージアム
刃物会館

卯建のまち

○九月二十一日・十月十二日
＊四方樹大学
参加者延べ三十六名
講師　山田　孝氏
（刈谷市文化財保護審議会会長）
講義内容
・「天誅組参加者を支えた村上忠順のネットワーク網」
・「深見愛子の語る村上忠順・深見篤慶」

講義風景

○十月二十九日
＊歴史探訪
「養老日記草稿と養老公園」
参加者四十四名
・産業技術記念館
・桑名・六華苑
・木曽三川公園
・養老公園散策
養老の滝めぐり
千歳楼の見学

産業技術記念館

○十一月二十三日
＊忠順翁命日墓

○十一月二日・十二月七日
＊四方樹大学
参加者延べ二十七名
講師　塩村　耕氏
（名古屋大学大学院教授）
講義内容
・「岩瀬文庫のルーツ」
・「村上忠順翁の手紙」

講義風景

忠順大賞入賞作品

応募期間　十一月二十三日から
一月三十一日
応募総数　一五七八首
入賞者　二十名
選者　荒川心星先生

入賞された二十名の方とその作品を紹介します。

○小学生の部

豊田市長賞
堤小五年　田中崚也
キャンプの火くらやみてらせ
天高く
秋の夜空にひかりかがやく

豊田市教育委員会賞
駒場小四年　松田湧介
流星を見れるといいな
真夜中に
ねむい目こすって空を見上げる

会長賞　金賞
堤小五年　田中翔真
キャンプ中キャンプのほのお
きれいだな
まわりの虫もうん楽しそう

会長賞　銀賞
堤小六年　高田桜恋
試走会完走できず
泣いてたら
先生笑顔で手をにぎった

会長賞　銅賞
堤小六年　加藤穂乃花
寒い朝仕事へむかう
父送る
父の背中はわたしのじまん

中日新聞社賞

堤小三年　鈴木慎梧

父さんとキャッチボールを
楽しんだ
ガシッととめていい気持ちだな

優秀賞

駒場小六年　中村ひなの

友達とブランコに乗り
感じたよ
葉の色変わりもう冬になる

堤小三年　中くまかいと

なつやすみおばあちゃんちへ
さとがえり
みどりいっぱい星空きれい

堤小五年　山本裕暉

ともだちといっしょにあそぶ
ぜったいに
ついてくるものみんなのえがお

堤小四年　清水ともえ

けんかしてきずながブチっと
きれたけど
仲なおりしてずっと友だち

○　中学・一般の部

豊田市長賞

前林中一年　川下裕生

かえりみちあいさつされて
ほっとする
いつもやさしいまちのひとびと

豊田市教育委員会賞

前林中三年　石川真綸

ちちのてはきりきずちまめで
みぐるしい
くるまのしゅうりしょくにしたから

会長賞　金賞

前林中三年　柴田凛菜

負けないで君の言葉が
強くした
君の笑顔に救われたんだ

会長賞　銀賞

前林中一年　野々山花衣

あしたもねりっぱに生きれる
がんばれる
ともがいるからうしろはむかない

会長賞　銅賞

前林中一年　杉浦なつ子

えんげいぶのたんせいこめた
はなばなに
テストのあとのこころいやせる

中日新聞社賞

前林中一年　桑島一樹

病院の友達思い
電話して
小さな声でも元気を分け合う

優秀賞

前林中三年　杉山瑞歩

にねんはんぶかつとおして
きょりちぢめ
ないてたときにもいっしょだったね

前林中三年　山下佑海

帰り道お互い相談
しあったね
支えられてる支えかえすね

千足町　浜下外次

公園で二人リハビリ
する姿
親に似ていてつい足止まる

亀首町　唐澤尋子

忙しくも笑みを浮かべる
看護師の
世話する仕事心が和む

編集後記

本年度は、深見篤慶と村上忠明が旅した養老を訪れました。二人が泊った千歳楼や養老の滝・養老寺など、当時の風景が偲ばれました。

本年度の四方樹大学は、長年お世話になった新行紀一先生が病気療養中ということで、山田孝先生と塩村耕先生に講義を引き受けていただくことができました。これまでとは異った新たな観点から忠順翁の顕彰をすることができたと思います。

総会では、駒場こども園のかわいい園児たちが銭太鼓の演技を披露してくれました。

本顕彰会を支えてくださる方々、またこの会報を発行するにあたり御協力いただいた皆様に心より感謝いたします。　（事務局　酒井）